



TITLE:

水族館

AUTHOR(S):

CITATION:

水族館. 瀬戸臨海実験所年報 1987, 1: 31-31

ISSUE DATE:

1987-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/178807>

RIGHT:

水族館

水族館活動の内容は多岐にわたり、単にコレクションの豊富さをもって良しとすることはできない。しかし、実験所周辺の水生動物相を忠実に再現して、教育・研究に資するという、この水族館本来の目的からは、飼育動物の豊富さが活動状況を示す大きな指標であることも確かである。1981年の第2水槽室増改築により、水族館の機能が大幅に向上して以来4年、採収集・飼育技術の向上と相まって、展示内容は年ごとに充実しつつある。

1985年中に飼育した動物の総数は別表の通り、922種 16,343点。この内12月末日現在の飼育動物は541種 6,834点である。各展示水槽の配置と主な飼育展示動物は45頁の図と表の通り。本年度中の主なできごとは次の2件である。

イ. 第3水槽室淡水魚コーナーの改装：これまで熱帯性の淡水魚を展示していたこのコーナーの内容を改め、9月から「紀南の淡水生物」コーナーとした。この改装に伴う321号水槽の改造と322～324号水槽の増設は、次年度に持越された。

ロ. 第1水槽室恒温装置の部分的改修：この装置はヒートポンプ方式により、外海水を熱源または冷却水として、101号水槽（245ト

ン）の加温または冷却を行なう、当館独自の設備である。例年通り12月始めに加温運転を開始する時点で、装置の中心部であるウォーターチリングユニットの冷却器に、冷媒ガス漏れが発見された。この修理には数十日を要し、それでは今冬の保温に間に合わないので、急拠、第2水槽室各槽加温用ボイラー（幸い余力があった）の温水を利用することとし、第1水槽室地階機械室熱交換器—第2水槽室地階ボイラー室間の温水循環配管工事（65mm径耐熱塩ビ管延約100m、附属バルブ8個、保温カバー等、工費100万円）を行なった。工事は年末に終り、101号水槽の加温を再開したが、それまでに今冬初の寒波に見舞われたため、同槽の水温は13.6℃まで下った。この影響で熱帯性のヒラアジ類・マツダイ・ソウシハギなど12種77個体が死亡した。

ボイラー方式による101号水槽の保温はその後順調で、希望の水温（20～21℃）が維持された。この設備はヒートポンプユニットの修復（新年度に冷却器の更新を予定）後も、外海水温が13℃以下となる厳冬期に能力が低下する同ユニットの補助装置として有効である。

1. 飼育動物

年間に飼育した動物の総数は、日本動物園水族館協会年報への報告内容に合わせるために会計年度区切りとせず、1月1日～12月31日の間の集計とした。分類別集計表の左側（動物群ごとの小計では上段）の数字は年間取扱い総数、右側（同小計では下段）の数字は12月末日現在の飼育点数である。飼育点数

が確認できなかった種類については○印（1～99点）または◎印（100点以上）で示し、集計には便宜上○：1点、◎：100点として加算した。従って実際の飼育点数は集計の数字よりかなり多いはずである。

尚、熱帯性淡水魚は10月14日まで、311～320号水槽に展示していたものである。